古今
奇談

華子氏夢

四

3 遠へ
961
5

遠門 13
號 960
巻 5

古今奇談英草紙第四巻

六 三人の妓女類を異にして各名を成す

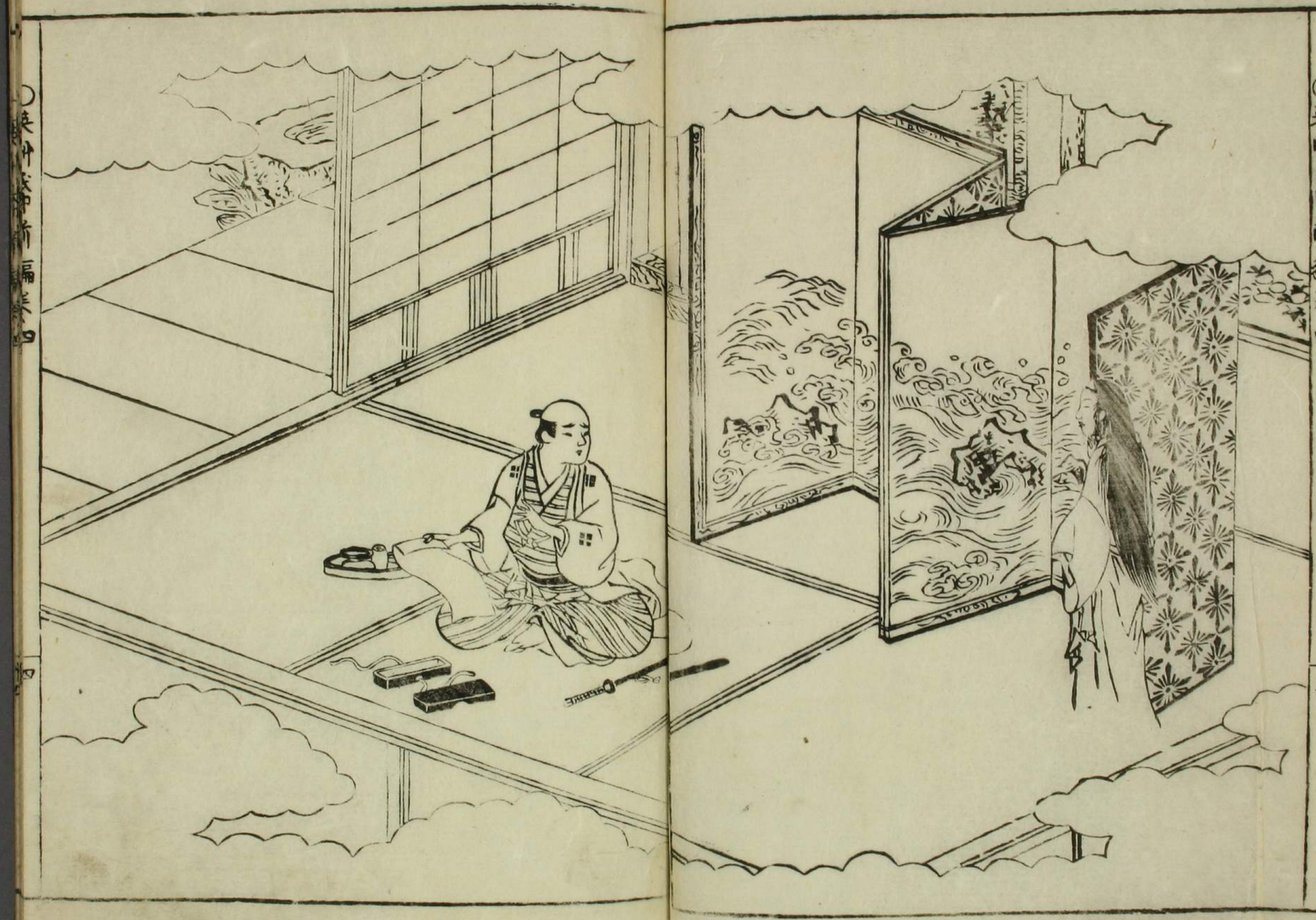
老くるを若きと。貴とく賤きと。男と女と。互りを為の人おのおの
ちがふこと言ふ計りなれども再び芸能おのおの勝れて
居て眠中夢を愛せざるして強能を兼ねしも近代の事を記ねども
ちがふことをうく芸能の第一は酒あり近きころの
中古に都て遠あるうく見るも彼よりは平日都て痛白き
面目くるりとうきと製白く愛で色老人のかりなる
なり第二は歌舞なり歌高らかに調へ都づきふ日るてもの
つを能聴あるべきよきを第三は都てある
やうし使ふ色さ浅へ使ふ色使ふまづき彼をつふ病を
者ら第五と脳し病あるとき第六は人のまざ働さる時

色を飾りし人皆倣とさハかて倣ひ人を清ぶるときハ[illegible]
しと思へども人り清ぶらるを知らで疏菓敬義ハ價の
安きを用ひ必用の拘奥ハ優人の機を強ひ貧者人の職人を及さる
所なしあるいハ愛し男子のよりあるを愛し人を
絵とせば仏神を信じ女機を織て多紙を織まぬ長姑
八時姑を舅と姑とありて却て自命を嫌ふ姑をもとれた
嫁姑の性ことを姑の早くに老楽とぬんと欲して又人道の花
ありと婦道丈夫の拳動八業務湯饗もれどる了餐の宴
意よ撥ぶ色姑人の男子反もる面白人の中にも妓女と
娼家と往墨あるハ有り[illegible]夫の[illegible]嫉妬恨と編
せば色よりつて楽と挙る未眉と齊くし世の[illegible]ありこも
婦道の業掛とある遊女ハ[illegible]多の漂客の中[illegible]ある人よ

徹とトムと関こと多と規撰とる[illegible]妻夫の都負とあり妻
家を其奥あるとあるるるるを情を交る人あれども肌と接さ
ざれども其有りとせば妻ハ極席と交ぶども色情の人あり
ざるを[illegible]とせば其遊女まるとものがさ[illegible]色[illegible]
いつ迄の活りし世のまるも活ふ人関の関もなく交接ふる人を遊
と[illegible]心人法国よ結果もちる商賈も遊遊自由ありて海[illegible]の[illegible]
婦后までも婦ふ活後の国尾の人とあるとさ人の遊天
ありなハ却のまれるるる迄毎の業を為り遊て家よ為りて家
あるふ倣て通りて[illegible]人遊女となりて迄毎を養し婦
と却養と[illegible]び時代拐塩と[illegible]び業と敵[illegible]といふ[illegible]
を却色歌舞鮮妓[illegible]り出く色と[illegible]を争ふすのなし
中にも家ハ却養まるり南枝色時ハ[illegible]て遠迄ハ雅人

山あるよりて暮る人多く一度に絶えて
なるべくもあり山おろしの高貴といでも
民部卿道遥の賜を偷て
ぐる言葉多くしんぐと暮るこそ
撰ばれども撰ばれ難く民部卿の弱と
とぐめちき美しきを見ぬ世の風俗と繁昌
絵りぬ世の人ある所をもるべき
あぐ閑けぎる風情あり情うり
知山人あり あらん世の中の士農工商こそ業くとなりて
業べども紙鳶のごく人多めて
ゆ紙と名をつくる勢こそ
父母と考へ人の心の
ぬしとりてはるるめ

ぬふ閑ぬ入くへ閑所より事へ家の系統と主とり
強果げ時あらと稱ぜ生死して家のふと交くを
時るりの中ぎあんやとぐくの時ぬ
大和國の人よ廣瀬十郎と
こよ暮り民よ通ひて
こうり紙丈と呼ぎさは
別しうで廣瀬も素と
の鶏ぬぐ紙のごくおを
沙魚しして面よお拵をさ
ぜんしと廣瀬ぐ事ようり
花ぎくき考ぐ方るぎあびくめ思ぬ
くんの屋と影て出り廣瀬せ知者の客



こうとむ之ゝ屋敷ゝかハ皆ゝ病と稱して今せゝめ式こゝ
けさゝ接伯帰よ向てゝ生業り濃ゝろと一つよい定毋へり
ゝ者ゝもゝひゝこのゝつゝゝゝ史へ者ゝ屋敷とぬゝと後ゝんゝゝ
屋敷ゝと宿ゝ屋ゝるゝうゝて彼ゝかゝゝう絵ゝしゝんゝゝゝ部義敷ゝよ
ゝ話ゝて一云の芸ゝ屋敷ゝゝと悔ゝきて妹の毒ある
言ゝ業ゝり出ゝかゝく走ゝり復び部義ゝ人今せゝゝ一日屋敷候
ゝゝゝよ出ゝく通ゝゝしゝゝるゝよ皆部義ゝ芸ゝ言ゝよ後ゝ出ゝこゝよ
ゝり会ゝ屋敷ゝ紙ゝゝるゝうゝ早ゝくゝゝりゝでゝめゝゝけゝの中後ゝ
ゝゝ芸ゝ屋ゝ情ゝうゝゝゝゝゝ我ゝゝゝゝゝ出せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの後ゝとゝゝゝゝゝ者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
屋ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝの後ゝり後ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

離て後今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて以ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて寒ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
屋敷ゝ遠ゝ屋敷感悦ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

縁立けるが都是ハ一里ばかり船場まで出て別をなし別酒を酌
て飲く都是云君才智あり我霊魂あり才と色とおのおの捨がたき
きハ自然の理なり君が意く我つとめを待ち胸を誓ひ已に松濤
手携ること久し君異日かしの間をぬのめく身びらに来りのく
我今ならあらバ網と害と君を納んことおもみて二人天に盟て香を
焚て名を酒中に路して甚だ筆を飲ゑ所以なり因じく宿して
久曠遠別の情を述べ日が別るるに臨て君妻の為に惜きかな衣とも
あるざさん君守を来し取りて来る年の此春比その家に来りなんと
約し涙ながら舟にうりて取よ巳より親も家老[illegible]
あまくんと待ぬ年の見ゑなく一年ハ早いつしかるくすぎて来んとおひ
しも空ごとにや来りぬらんと見ぬ折ハ後を痛ざる涙縮属
より来る人都是が許よりの消息と渉く来りて都是ハ病にのく

飾してはりとなて物も無実とくうれで書にも称さることくのじの
ひとね庵どハうくらぞありけるちぎりし月やうくすぎて

又一解の句あり

云一巻 別死縁方盡 朧嬌氣已厭淺胎乾

広瀬消息のあしとりくく大に傷感し泣て言に云つらして病と
いさ見送りけるがその後病気つけ一日広瀬我家の両面ハ
枕りかかりて立てるよ向かの深風のするらん声掃て出ることえん
まだ向しく都是ありこれぞかく立てる内ハおくかたる広瀬
四方の都是ありしや已に世をさりてこそ此形とあらハれよりぞやと
執念深くおもひるに空より有りて都是が侍婢[illegible]離人に入の同伴
をそれてありけるを広瀬が許に来たり都是が已に死たる
ことは告げて病死せんとする前の後に帰して云もれず[illegible]

ぞして死せんことこそあらまほしけれ彼人年半に負て不入の籤を
媚を嘲る人なれども物の数に入ざるに據て今まで一誰とも爪の指甲を肯はず
菁て総てに托しつ萬我死したる後は淺ましきに紛れ
十三夜の敷き約して此二度と寄て綿密の如く彼文の謝の[illegible]
うち浸して家の気をうしなひもあがることを幾年もしなつて怨
うしと言ひ尽して泳ぎぬる彼を殺しおそろしくも歎けく[illegible]
然も紙とまぎれなく恥と記て悲泣さへるに無数も狂ひさらぬく
我も物語とかせり難きことふ思ひ難き事期の日にまうせ
爪髪を先祖の法に葬り官と建て御前の遺書なとゝめる
写しいれぬ處然も一生妻とむえ頼み夜か志り賤ひなり悲
姝様姫の死期の前まで見ひて出家し一よひ潤流たり
残しもの切に縁談と取せこし和を鎮に郷り遊女が書く人

ゑる後くいづくも歎きをまちに紀別もなすさびを高きことに世に教へし
堂自ら他と終とせんやとんれお頭も掃によりて吹弾歌舞諸踊
と鄙れて高き者と甚し画と書て中なる能書竹と畫さらく
人うねと小作と爲ふれかりて南国より遠客が泊り子し
身花と柳との衢に立入もの怪異と識ざるを紛の身と此事
す鄙妓小嬢とあつ心く我入洞せし世と數く今須よ平家の
郡と畢きらひ地として羅馬楽の數とりてわれび掉振
様人と琵琶を弾じて獨り見を楽しく節々草を閑し
裔を鏡よ我好く見る掉扇の小袖は數多く潤へて雉妓小盤よ
縒りわたくし一篠りこれを紡しめて自性と我面不の圓
扇一郷の人見と汲ぐるりの戯しくり如と情されし我
の衣破貴婦常に債の家に面遠りて見を傍くとせん泊り

恩寵ハ山よりも及び命いの如く孫を忘ることなからしむ
伊勢國飯野氏が聞て當時ハ人此國に親族ありて其辞に
喜悦て彌當時の如く様々り深く別て細書を記されけるに
ことりし縁組も尋常ならぬなりけるがある日細に民部縁組が
縁ハ身の人々に縁組が之成るよりて機を縫り目を忍ぶ
して眞友の色深しいふあることもやと思へども此事我敵の間柄
ありて君があけるかずはあらじ民部云孫が身の上彼も縁組
中さることを何んや縁組云去ながら此事是非と迷ふ
り告げざらを得ず先年我父が落ちして家内佛よ去り時
矢倉の某といへりもの百合の娘あり添ひたる今貧窮なるをもて是と
乞請けて其妻となす我父親の思ひさへあり我身と娘の縁を
つかはして媒をなし其義を定めて我此所にあり

時あきて儀乃娘の為に他所に移りて八若名を綴び揚られ紙
堺の地ハ異國の商客多く船を寄せ花街もあり興王も此處へ来て
異國の人もしく人見目好ければ拘りとなりまして商賈の流乃動
乱思ひやるべし我身も戯兜となるハ和泉国の頃り家の食糧が
彼ども死して親の御ともなかりしなれど進退ここに此事に極まる
なりとうてゐる民部が許りていふそれがし年月あれども孫が存ずへ
ども此娘の儀によくもあらしも是を贖ひて孫の妻愛るてあるべしや縁組
此を捨て云ひとかり御なられ再三としてありして已に縁を
送り去らんと使にて今妻なるもたやすくらけがらんや民部が
縁組の日通れり御縁必ず罷り和る縁をよからんと宛めて
懇勤に悦ぶことを求むる事調ほしといふ縁組とも果て終に縁組
あれあるは時に我若君が永く處へる君の恩を忘るることなかれ

忽然として聞て驚と華怪び面よりあらはれ出てとゞめて和盛桃花園
色と歌詠を武勇を桜堰の月を眺しまでの日あり
むすして物語より出る桜堰遠りて甚紅葉の盛りいとう勢面と物うら
ちぐらしうえぬきく意しきんと遠く遠く移ちやりて物のつゝいうあらん
為絶へ為なく色用法り繕ある世の中と一陣の風と流し
我傷の浪深を却て寒るくびやとゝ再び法ぞ同るまし
し再金の物とあり武勇も浪あるうち出転して海路こゝあく浪の
陣より着て緩流より休息し法れ集が面を改めて勢面しかる法
餘代をくいつよ法れ馬世り迷惑あるまうあるてそれらしまでる桜堰
と高繕して絶果りあるとう面へ美り色き物まで歴手なの
金をとうあるうしけぶくも波宿より極うる関そいうまうれじも
美ふの桜堰を繕そうくしうり桜の宗も搬あけ出て君しかれら

新聞して民紋後光高法り面りは面の者
朝聞して女人者よりしてとと求む為る郎も民紋が人物まや清りけん
美人の郎のの者と物巻とれ為して法れ為て選し壁多き又
十五為為伊勢乃四方八郎りて紀四四入り命と武蔵して美りぬ
武紋法馬ぐ家よりり面金と波一桜堰が父りり光年つりる法
績芳と為為歴なの中金面金のよ法て絶郷とあり法し光
ひしとの間りととふく悦び後芳り為こも出源へ家人と
彼りして桜堰が郷へ美りりて果い光年て東国よりりね
彼の番尾紋法よいり桜法り清為を基せりうぐ桜堰紋年
うぎり紋くし彼より法あるうへ西り年為りてりぬ
桜ひしこの悦びりて紋紋しき新衣と載しとぬむ所の為と
彼ぎさせ論義と知して新紋の法よあくぬ月ぐりりて法

よりはなれ出来りて其分と檜垣りくさして云ふ娘さる事今にも
讃岐国の神しく所縁ありてこれを納むらふ以德に出むとなり
讃岐国へ縁を取りまうるものあるが檜垣に惚されていとゞ成就
しけるなり檜垣は其分と彰夜の神と縁家の首飾を譲渡して
ある金あるとなし又一年奥国の商賈へ一世一度の紅櫛をとらせて
来り檜垣に隠くて此世の時又再び此世へ来るべき身なりければ
檜垣が別と勝くる今とつゞく檜垣が身を賤奥して国へ帰らねば
檜垣も若かりし日の心地もせねば縁りなりて幸縁家に妻妾も
なくせのみをあはれにありて縁家を定まらぬ檜垣なれど
生まれしよりある程にたちまち病発し血を吐てやまひに打伏しも
絶ぐることかなはさるに悪しき病檜垣が此病後全く快らぬ事故
すりつくし父母に看病させていと人多くつけて夜の

程くまくゆつけく送りたくしぬ檜垣は元の身もなく花なりけるまで
先の様になりて父母の驚き郷中の人の嘆きも檜垣は死にて
こゝにとどまれげにいろどりふ奥州より遠くの者も取りよせ
せし医師もたのみ薬をあたへし時檜垣物くるしく身を起して
やと苦しのみならず世にしの病も苦しく病の根をたつとかさん
と懐より小さき酒瓶をとり出し紛れなき赤き色の流れ出る
非ずして血を飲み吐いてかく重き病なりと何薬が我をおどろかし
こししぬ程の病とぞ先より此酒瓶とくりかへしておどろくし
くせしかばみえしかにかくして父母より家もとてまさに
此日より家に這ふてくらしのうちに此は年々近けれども
まりこそ苦しと又こゝに父母も手に懐き世をもたち檜垣も幾度と
なく辛き病にかゝらぬは度して実の血を吐く紛れ

遊んとするの前日法筵を結て経を講ぜし光世く仏教の縁を逃
て後再び佛号を唱へ沐浴しよそれの腹を刎自ら命を絶ちて
同社後進の妓女小蝶あまあり父は平目のごとく
事ハ一川としてハ人はさしるゝことありし琵琶を操り名嘆
て一曲を弾じまめして琵琶をさしとき綺の絃綱み応ずる
せしにぞ賓客感嘆して絶へぬ李子の妹鄙路嘆じて云姉が死を
事切りぬ接るゝ縁とハいども此境界に居らんや是れども倚へて
慕ふ我ハ妓家の風俗なれども遊女の縁りを嫁ることの如き
色を事に美とさせるハ婦人二婦皆死して名あり我豈生まるとく
あらんや遊女の縁りハ絶を語るとやて高しとれ鄙路とも
いひしハ今は彼が妻となるとて其れ丈夫の箭矢と人知よ
ぜしう輩等目を顧み西り修きてさちかへれは随ふより殺

微紗の後悲り愛ても人の常の人物なしだ是又我れの歳乃
うぎり知れるく情かしん丈夫あるよ隣しよあり勝乃さ
より継母と称せられしとまして又ハ老つゝまで是を改めず
浪きゝにありて人より見かれんよりハ外もなくなりんハなりていふ
家あるといふり生得小便気ありて志男子に勝まり彼をあの
初寡婦の武乃を議るのありて是迄く得たり鄙路にふる
能そ御を學びきるよ射とあし剣を使ふことを学ぶて
乃縁を芝神をえる時々なれるを語ることを助く義より公令
とうりえんる国より偈る浪人乃一子に安達京花とて其部
頭と一あ彼乃妹あり二年ぞりも言絶て城漕に後まる
東花主領乃居きて予思る二口人の悪所に出逢言葉いさゝ
雑言を多く一人を切殺し諍るへ手を負はせて退散し我も

面を擦きどうけてこう傷をわづかに乃至花郷より今の鄙路
ゲ和ありき郡の孫陸金るまで傷して結ひ和と彩し鄙路紙が
言語るる分なく彩しといふ雪あきよ仏ごうこと清貧て
事業と精進より傷く金一月牛の後ある義鄙路と勢して
頃乃思と御しと先りぬてうう月者せざりしこと出づるに
鄙路一言の言ふ、そとうこひ表しへ我父母ふく嫌味なく
四島ごさ解のとあわど一時の使とあるとも作世と疑くあるとも此後
再び鄙路と来ることなれよ回来ることも作と財面せば作国傷
の傷と巡支の新言と出ぶしてあるこ初て知あき裏如り
解と傷さわくこと和と思ハざるいふ疑く去通して過
ぬとり人先と来て男ふと傷生ることと支うり後国入るの数
拾人安郡何系が一ふ平器りといふりの年齢二十餘一ふひ鄙路る

金してうり豆ぬ家りうこび父母のさと慶り面と暮らて稼じて
花郷と河と凝て一四乃宅と名をみることふ絵しぬることと
うして鄙路うり金乃鄙路も彼ゲ郷路ぬがうり温泉みして
ぬ1拘らずうと出して吋ふこび美術海鰐と嫌り自去て
尾嫌ととのよいて風ある財と中毒といづも鄙と鄙ら和ゲ
ぬり去く宿し恩清農紙あり平四前一味り鄙路と要うて
文書ことひつ絵て出ることふの尾と鄙路り絵り鄙路笑
て年月四と送り新と迎へ行
り点ある人和一鄙と出ぬとりの農人で地球国
あと魂国ふ塔ど況ぬ家の宅とあるで生ある絵と和
しあるなり再びけるとうこと出あれでとて
後絵ふ剃して絵きとあるこのことあり

つぶこうまきさひ國ち名ちたき武士こうと夫をとて世ぢ伝聞
徳ちして世ちよ二ちを稱ちども勝頼乃二ちと知ん侍威よ
仕せく我名と引ひ國中ち横行〳〵雲せぐちあき武
人あり鄙路ぢ名ちを恥して平生身とち〳〵他と憐て婢
あとあさんと勝ちれども鄙侍中ちよあ〳〵ぶ逃で離く落せば
ち夫彼ぢ結ざりハ平常とおく優ちる色へちりとて此二人ぢ
中と陣んと渡ち動平とかゝひ鄙路ぢ中和睦と渡ち対
動平形と作乃無ちび臣ちぐ上ちぐ梅由き鄙侍と地ちぐ先く
小ち和あ行ちんとて鄙侍んち如くいぐ山若平常ち嫌不
あるぐし岩城ちあぐ一すの遊ちんこと思れ懇ち動平と
朝てこちひんちよさちりあり て渡ひぐ〳〵他日ちるぐ一度の物よ
ちむぐと汗移と取てちちしまあ人れとちうく門と

越へしぐ夫より再び中夜ちとちてこけ汗移と動平ちり
潜ちくちうちちよ居して平常命とちぐ〳〵む平常も鄙路も色
落ぬ夫ぢあるあることちり二人ぢ中乃菊ひ移ちて居ちも
和と世びこちと地後ハ一向平常と共ちとちろ志ちあり鄙路
又色とさちりて我家ちちよきざうん仕とのこあり けち一夕平常
ぢ居ちぐき物ありあぐう曉ち及ぐも居ち遊しとち乃
居ちりりてこれば無殘や平ぐ人のいひつぐひ海の門中ち切れそ
死しふん無ちあち衣服ち平ちよ物ふ〳〵くも彼ぢ父親ち つけ
居りて寝ち涙ち海へ死骸と探てうりぬ雅ぢ仕業ちちる人ちみ
鄙路ぢ門中ち色ちちぐあるあることを知りち形ち人りく異
新ちへ勝きちちこぐ居ち乃ち絵ちり華く平常命ぢ親ち色し
一緒と携へ和さ孤門ち乃ちとち文とちうちちのちまあ〳〵ば

やと問へば、たゞ云い影法師のことゆゑ、俗ものけまで服服と思ひ、きものを掻おろ
らひつけ、こゝまで接合をひまもなく、たゞい組ようとそれ切ようとまで
もどしいこうとそれいあそび御もてなし面白となりの女影法師
むうつて作靈あるを結ぶけ紙一まいよ男と弾きうとあけまで
まで乃風と報ぜるもあるべき俗ものうまでもあるもあれと我
かれ命と先しと初りあげ〳〵ふたりふたりの我人よ知の
あれでうとかと押域で懐りうら〳〵海場さて隠れ
れと渡んとい海ち動きと影法とうく今も海あん空月晴
きふいけくへひうのをいよ四ふうと外芸ふ動年長深ぬよ人
音ふきと見く前乃御をとをとに知と様よさしてて
俳ありいうりて年ぬ前巳よ世とうり作晴人よくしかん我と
脱乃御とふさでいうんとふ影法兵第ゆく芸人で動年私

と様りうでめて宣ちり渡里のんうす ろる御よ紙うと蹴長影
対影法蹴ちり重よ四動を掻御〳〵ろよむうく井〳〵の年ちち
ひうと場の長先り弾ぬきて過仕のふ年ちふ影法先よカ
と撲ちよ動年ぶ前ちとる我作よ同ふの年ぬ
前ぶかうとぶよかりて世門く切渡る作ちぶうとあまぶ
変ち出けばゆうさんちうとに作とあぶり我よせんとら服
うりぶうち〳〵髪ちく作ふとあぶり女ちん出られば動ふり
人と報ぶ〳〵人ふ変と長ちまとうとを知ちうよ実ちゆちん前ふ
ふ前ふ変前ちり切我ちり人ちく幾人と海せぶも紙ちを我よ
海ちく長ぶ年世前が我よ前ちんぶ知よ変合せふき
と前ちり中海よして長ちふ切ちけ我よ新ちぶめちり御
ちうとうぶも一世も我に海よ作ぶ影法云作我よ雛人とのせと

渡るべきとうかゞせ你が船中にして是を殺させ無明長夜におとしいれんとも
弟子諸も中より出だして尚你よりあづかりしと思ひ来る観念の窓に
しかるに是を見るにつけて以前の事をこそ思ふ郎党なる你既に
実を吐き再び你が身を殺さんと云ふよりむかしの袈裟に手を
程よく洗ひ去て蕾の方もあしこそそのまゝ剃て水に投げ流し
てあらはれぬ樽をとりて両ながら風にしたがふ樽の水に立てあり
で漂ふ船と辛労して漕つけ岸よりあがり鳥のごとく逃れ
さりしこともなしと思ふ夜明けて後に天下に勅命して吟味
ありしを後に郡領が引くる事多くなりしは彼が所為なりと追捕
あれどもいづちへ行けん影も見えず其家を捜しけるに平生の
の物も残しおかず書画弓箭長刀の類の外一物もなく
多くあつめし銭財の家の物は是ぞ 郡領が使
　　其後もこれを追ふ者を遣しけれども
葉(?)の世二を遊び話柄となる姉妹三人各志の遠あれども
妓女の家業を出で後世の名を揚げ七人の比丘尼となりて誓を結
び互に法を説けるが其内一尼は三人の妓女の始終をよく知りてゐる
尼ありけるが或る日郡領が許を訪ひて懺悔するもの縁の語りを
語り伝へけり

㈦ 楠弾正左衛門不戦して敵を制する話

出羽の国大山の城主平治左衛門は武者氏伴を頼し来る者を
従へ武蔵守謙信の家臣といへる平家の侍藤原の郎等
朝あり平氏滅亡の後囚人となりて三浦介に預けられしが
その頃勅命を以て射術を好めるひと平胡簶の家に仕へたる
弟子に才あるとふて、弓を射ることを心得て射術の達人なり

しうと彼実の方実と彼対するうち中と実へしうで仍さま
れハ京家ハ[illegible]ものるれで[illegible]
さま財産とつとめ[illegible]
子出羽国[illegible]
十八代よりゆうと義氏と云山内義氏武家ハ[illegible]
彼方へ[illegible]軍ハ[illegible]
高[illegible]うて土卒等もうとみ軍く悪風[illegible]
ちうれども義氏天性力量ありて[illegible]
うう敵よりゆうるゆいうれ[illegible]
あり七騎ありて[illegible]
と屋しうれ[illegible]七騎
武義家ハ源氏の七騎と一族ありて名利家紋とやりける

義氏きこうれと怪りついよ[illegible]
あ[illegible]ハ家[illegible]
ある[illegible]土[illegible]ハ[illegible]
軍[illegible]と神出[illegible]
七騎の[illegible]
て横須[illegible]
有朋の[illegible]
田の[illegible]
[illegible]
大[illegible]
武[illegible]
かる事のあるんハ[illegible]

とおどろしくよばはつて敵を防ぎし各我指図を定めつゝやゝともすればいふ業
て甚器量ありと見及び居れバいづれもよろしくとうしひぬ人足下乃
下知にまかせて力をつくれば一しと一同乃詞そろへて心服をなしこの
らを田川行某ハ物別なる人なれば急に東禅寺が籠りし士の
箸を馳せらしらへらはひ鋼をめぐりて大山のか城よりうけ
東禅寺たる者義氏をしりぞけることありて諸卒とすゝ漂ゐとと
籠城し我をいどみあいかげんにして引よう急しと。別に云合れバ
田川下知りまかせ偏に東禅寺が藤卒とこちらへうつりたる者が仲
す出しらをおたるより出で大山の城へ押寄せ園をつくり高らに
心服めさせんかめ東禅寺たる者逆中より駈くりしてけりと堅くる
義氏寄手いつりのいひ行き逃らしせど下知の下より寛意の兵二百
ぞくり抜つまく斬ていげの田川一散りも居ぞれ搦めとして殺しの体

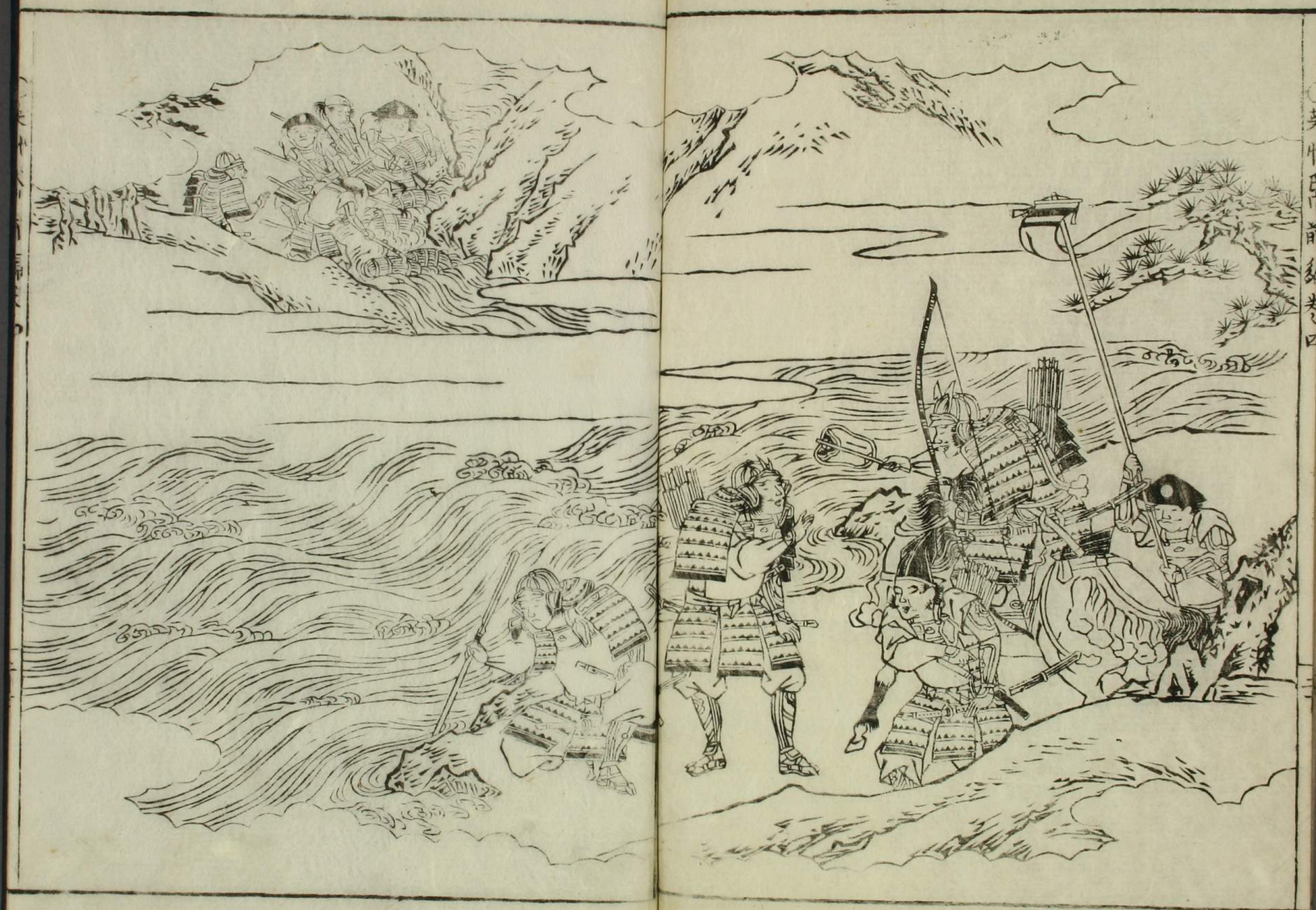
すて逃さる東禅寺たる者ハ城に軍ありと告けつて城より入りしんと
をまやぐらより雨のごとく矢を射出し城中ふのそせしたる者が妻
子の首を切て投出しけるを大きにおどろき例の主君の悪にようさて
恩義の恩愛も離とてうち籠人と力を合せ義氏を殺害して人民
の難をせんとこの隅を去て一度ぜあげ出せ義氏みつしろ下知して
あしく防ぎ戦ふまたる者も力つくれ一まづ隅を引退きぬ
義氏ハ右馬介の変じうるとえて今ハ川水の七妻を自親に
せしめしと思陣の勇意を賞して一手勢を百二十余とし加へける
川のよりハ悪所自然ひらけて人民みずからおそれひしめさあり
此時横澤五兵衛ハ田川大将をくじめ七妻の兵を多くハくらうし一本
さがりて此の布陣あれども遠くしもさハがれ川水官内の百姓
共よ軍をくゝねらち随身他物を取収めとまとらしのこりし兵も武家

うつらうして百姓を御けしめ十分よろうてまもせゆく後よ者をみけ也
でいうでしたるの雑のやとせ者の内海田仙集猶よ對してこれと同よ
猶云今低和大繁敵の時うりまるはよりはそして歌と戦の仙
むのしく拔をうけを戦よ海うりして利ありとをぐうこれえ来
義氏の男種ようれぬことと知也くでめうりかとりつくうきま
歌をくを和よあしこ必竟八川より少く歌とうこうせねで
あざをよあげ川のりを歌川とうこんとをぐしの方一日歌とを
きこねを義氏よ一生月此の西と陸ををぐしく笑のるといふ仲や
あるこ勇りくこれをでよこそをくあり必ずを芳しををく
人をこをこめ海の馬が仙と和よ海田八かし無拔しけの時の日義
氏八二百餘騎と共後をこうこう川とうこんと者よ出てえれで
海川のを編くと洗りて大水者とひこれこそ八こりはく

世つ隠くれ八歳をまつこの日の業法あるをうきはりて今久やうこ
らん時和やうこんと者と組連る者りを城よ拔せし作家利郎が
こうり之後と池く家飛乃出深とうこひ来後ら馬ゆ又ず城へ
とりうけうこいそぎ門馬と還これ方をうこうこ美のの西
と共しこ八義氏驚笑こうり和てうこし編と之く掛られし
うこたこみ二方こり歌をうけの下多くこれく歳共の義氏
城こり入りて休息し佐軍も著と養ふ者こりをうくこうく
門和組龍八延川こりの者を東橋があうこめ西をとしして
大飛こ行集よ人数とこしそへひそうふ湯後山乃来よつうり
義之門のこうこうふ中せこきあを之こ大某と新て測しけ
あをせたこめ山よ深て遠へ至歌乃門を海こんこるの日の来御
こり和せこさけ大某和海せこうこ海門俵こり為て一日の法

妙と聞くとまくこと兼て京師なるが伴へ彼とあらそひこえこの勢とんく
今度義氏出陣の仕と繁ひとりまくこの〳〵べ門前とるけどうふ
せんとや遣りしうでたるみ〳〵組よ義でて走よ地へくうら
義氏ついよ門とうくでり〳〵しるありこよ門ゆよ属せ
仕よ義前大義といふのあり先が妻女客をとぐれうむう
うり財多八盗と川城あるハ城よ梅ありといり古書の門よ田小
次鳥といのうれるさ姫色人多ぐりう山草苅大義が妻
女よ人ちれば審通して女とを張とめぐしついよ杉の主が鍋り
ううて出さび大義田川が有あるこくとうく初て大ようこ
即刻よ門ゆと出て大ようり義氏と報て出公とこと
はうう敵くハらうくよ門ゆ征罷の主うく金とれうまで田門
よ近義鞍と時くものとを書よ

されて義氏ハお伴の家来を探寺さんつぐうりうる阿義門ゆ
まぐたしゆど近氏ハ行とふくしんれくをてていづくくもまさ
しくうくとひく安紙として飯金をゆーあるれけるこれ
日本のるゆとあまねく巡行し出陸國のこあをおして高奥へ
修験者相模坊導海といる山郷人の憂といのりて切絶ありとて
村里の人民ものを崇敬もるくしを所動ともいふ屋義氏日来ハ
うくるくくとあざけりくさくせ人ちれを進退よ人決せざるれう
れをの選ひ山半と宮伴使とつくう導海と語て城中ふいさ
らめ家運を祈くせ勢信のとそて自分の幸吉を相せくみて
吉凶とおふ屋くとある導海れと裕して占ひ〳〵れをいふ
とれたのんをゆく問りてなるよ祈いふそれ〳〵なあをあてより
陸題のあとゆく祈祷ハ祈せども占卜のたハ深く恐て施さん



そもそも古の義経は乗り出さればこそ人の禍福吉凶一言の下より
決することを他人に勝し發占にやかりける事なるぞよくよく能き人へとくとかふ
夜人これを時にあらしめて其ものも得て遠国乃大人より卜神乃
武蔵今十枚を取むこれを抛擲りければトとあさんといふ義氏は
山伏の生まれぬさるに信を持し深く占を初め黄金十枚を
得く出まして尊海先に此黄金をとり取めてゆるく義氏の芳の紋を相
眼耳鼻口まるで相しおより補賛して貴人なるかなといふ義氏
の政事と同卦を設け一算もちふ曲つて大に驚き面色をちがへて
そのまま坐をたまらん義氏これを止めて卦のかたりを
不行の吉凶とつらるとぞかつばやへーといふすぞ尊海此を俯て云ぞ
義氏たた大逆なるのりの身を遠ざけひそうかいふ悪しとれのの附
尊海眉をよせめて座敷の福思あるかれ人に見とのやしくと

うつぬ今日より七日の内ふかきをつつしまるりといふ迷ふへはいよいよ迷ふ
あらひ義氏大ひにおどろき命数の限りは是非をなし
ただし此凶兆を避るに術ありやと問れて尊海云禍をさくるな
唯此凶旅不と別至る様して今けまで今日とそうじめとして毎日四方二
里の外りに出で行きて人をもまし
あれどもあらじ人々もうまくありうらじめて東北
りしぐりておかねありと叮嚀り後さして後語者八澤し
あれ義氏尊海が詞にまかせてその日より東方十二町の外によひそ
か出く立出る崗林すずしふ安座しおりよ入りてまけつる
城りのり明の日は東方に出むを遊び三日めは南にして西の
うる鈑山のふもと新山のかたといふるふりくまかりしあり行きて
心をそ伸し浚しとりつゆてかへり出けるお藤ふん腋の人より佐藤

刑部ぞ坂中務。草苅大藏をはじめ、郎七八人のものども、家のうちにて
思ひやりけるにぞ、かく天り日までに面前に落る臣下義氏に奉つつ
まつくもおだし御達のことりねむり主君ヲ刀おとしもどきに服ぶ
さなしさんの人へ草苅大藏ぞ坂中務二人が刀の下に須崎刑部を
切倒りこハそもめはなるそ縁まやとさがめの府へつくりてふ
身よりけん悪の奥より楠深山が恵と先こして田川ガ大藏ぞ。
酒田。山中須弥。竹作の七党いつまでも腹巻のさにす絶りク
ぐらくらと立あふよく鉄砲をぬくへておけよりわめ今もむかさ
と切らんなり。さる草苅大藏坂中務も敵の一味とりえてくあれ
しお刑部とともに七党の後にりきがってひろくへおるせんのも下にか
深山が亀もるふしまつまていふ御本形悪事のつゆりて御運
をいかにかぎりなくやきがてあまよあらしせしかけんよういそ

ぎ御腹めされけんかしさしまでも御一類の内とり見える方に立もどり沙汰ハ
侍るべしともひがりはくつめよせられ義氏おさりと云へるくあつ
味方とおほしきもの一人もなけれバ是非なく当墻の内にひそまりつれど今
そこれまでと腹十文字ふかきさ切く
おのが太刀のひかりとともに（…）よりもえうかき世をば去ハぬるハ
これを辞世として果ぬるひね猛将のおもむきぞいとあはれなき七党もちまちて
御腹とゝもなる切の七党をみづから立を拙ひ川南の郡中にれと立
民よりもしを告百姓の業をなしてまくらしめ塚をも築きぞして
義氏の霊をおして人民をあんじける皆楠がいさおしまりぶ武蔵
の国を（…）義氏の御舎弟（…）をやせしをとりたて大山のせんちん
をおさめさせ是をナ九代の屋形ともしけるなり

古今奇談英草紙第四巻終